

令和3年度 第2回  
ICT を活用した歩行者移動支援の普及促進検討委員会 議事概要

## 1. 開催日時等

日 時：令和3年12月6日（月） 14：00～15：00  
場 所：3号館総合政策局 局議室A・B・C（Web 参加併用）  
座 長：坂村 健 東洋大学情報連携学部 INIAD 学部長  
委 員：竹中 ナミ 社会福祉法人プロップ・ステーション 理事長  
田中 淳 東京大学大学院情報学環 特任教授  
古屋 秀樹 東洋大学国際観光学部 教授  
森 亮二 弁護士、国立情報学研究所 客員教授

主 催 者：国土交通省 技監  
行政側出席者：政策統括官（税制、国土・土地、国会等移転）、大臣官房、総合政策局、  
不動産・建設経済局、都市局、水管理・国土保全局、道路局、鉄道局、  
自動車局、港湾局、航空局、観光庁、国土技術政策総合研究所、国土地  
理院  
ゲストスピーカー：日本電信電話株式会社  
事 務 局：国土交通省 政策統括官付

## 2. 議事概要

### 2. 議事

- (1) 2021年スポーツ大会におけるバリアフリー情報の提供について
- (2) これまで整備したバリアフリー情報の今後の活用について
- (3) 教育分野との連携について
- (4) 歩行空間情報を活用した自動走行ロボットの走行実験について

#### (1)～(4)に対するご意見および質疑応答

- ・ 災害の観点で言えば、日常と災害時の両方で使うことができないと、緊急性のある災害時に活用することができない。日常から災害までワンストップの支援という点ではここ数年で大きく取り組みが進んできたと感じている。
- ・ 身体に障害のある方々を対象として防災の個別計画を作成することが自治体の努力義務となっている、こうした個別計画を作成する際にも、バリアフリーマップは非常に参考になるのではないかと。  
→災害の立場から重要なご意見をいただいた。災害についても焦点を当て、今後も検討を進めていきたい。
- ・ MaPiece 及びココシルについて、どのように情報を収集しているのかをご説明いただきたい。
- ・ 昨今、多様性に関する教育が初等・中等教育で重要視されている。教育プログラムについても、バリアフリーに関して学生に知ってもらえる貴重な機会であり、知ってもら

うことで一定の割合の方が協力してくれる方も増えると考えている。バリアフリーの情報を収集することが有意義であることを多くの学生に知ってほしい。

- ・ 自動走行に関連する産業は今後も進展が期待されている分野であり、自動走行ロボットとの連携は重要であると認識している。自動走行ロボットも小さな車輪で路面を走行する点で、車いすでの移動と同じ課題があると思う。そのため、データプラットフォームを通じて自動配送ロボットと車いす利用者の両者に対して同じデータを提供することが有用であり、協力していくことが重要ではないか。また、自動配送においてはドローン等の様々なハードウェアも出てきているが、データだけではなくハードウェアの規格に関しても、車いすと自動配送ロボット間で連携することで、双方同じデータを活用できるようになるのではないか。

→MaPiece は、バリアフリーとして重要な項目・必須の情報を、国土交通省の仕様に準拠して選択式で入力できるツールである。ボランティア参加者は、このツールをダウンロードしたタブレットやスマートフォンを持って、フィールドワークを行いながらバリアフリー情報を入力した。

→ココシルについては、自治体が運営しており、データを入力しているのは、自治体及び住民である。

- ・ ボランティアの募集方法はどのように行ったのか。

→経済界協議会を中心としてボランティアの募集を行った。自治体や学校が行う心のバリアフリー教育等のイベントと連携して募集している。

- ・ プロップ・ステーションは、最新の科学技術を使用することが障害のある方の自立や就労の後押しになるとして活動してきた。ここ 2 年はドローンを使用した就労支援を実施しており、足でドローンを操縦する方や、まちの写真や映像を集めることが好きな発達障害の方を中心に、国際ドローン協会による講習会を続けている。最新の科学技術により、障害の重い方々も働くこと、社会参加することができると感じた。今後ドローンがどのように使われていく可能性があるか伺いたい。

→ドローンはものを運ぶだけでなく、状況の把握に非常に役立つ。ドローンの空中からの映像を活用できればよいのではないか。

→ドローンの研究は米国だけでなく、物流におけるラストワンマイルの手段として中国でも広がっている。ドローンは地上を走行するロボットとは異なり、バリアフリー情報は不要となるが、障害を持たれる方々への就業支援という観点は非常に大事であり、いろいろな視点から技術の進展を支援していきたい。

→委員のご意見は空を飛ぶドローンを想定していると考えてよいか。例えば、自動走行ロボットの車輪が溝にはまり走行不能となった際に、空を飛ぶドローンで見えるのではないか。

→最近では、ドローンが屋根の点検やまちづくり、農薬散布等で使用されている。ドローンは障害のある方の就労の道において重要だと感じた。

→今後も新しい情報通信技術を使った障害のある方向けの支援について議論していきたい。

- ・ 観光では非日常で頻度も少ないため、現地で新しいアプリをダウンロードし使用することは難しい。そのため、観光分野では日常でも観光のような非日常でも延長線上で使用できる“スーパーアプリ”が最近注目されている。ココシルに加えて、日常で使用するアプリでもバリアフリー情報が使えるとよいのではないか。

- ・ 自身の研究室でもバリアフリー情報の収集実験を行った経験から述べると、授業の中でバリアフリーデータができることで達成感は得られるが、もっと日常使いできる楽しみがあるとよい。例えば AR や VR が観光分野にて着目されているが、バーチャルの中でバリアフリーの情報が提供されるとよりよくなると感じた。地図と xR の連携ができるとういのではないか。  
→国土交通省として多様なアプリを提供することは難しいため、バリアフリーのオープンデータ化にも力を入れており、多様なアプリでデータを取り入れられるようなプラットフォームとなるよう常に意識して取り組んでいる。また、今後、デジタルツインや AR・VR の技術が発展すれば、スマートフォンだけではなく、スマートグラスを通じた情報提供ができる可能性もある。国土交通省として、それらのサービスに役立つデータを提供することが重要ではないか。

#### (5) 本プロジェクトの普及促進戦略について

##### (5) に対するご意見および質疑応答

- ・ コンテストを実施することは素晴らしい。現在のロゴはシンプルすぎ、また、字が多すぎる印象があるため、ぜひ公募により新しいデザインを募集していただきたい。取組が個人や企業に広く認知され、参加者が増えることが重要だと考えており、今回のようにアイデアを募集することで広く周知することにつながるとよい。
- ・ その他ご意見等なければ本日は終了とする。

以上